

熊本で地震が起きた。甚大な被害が発生し、多くの犠牲者が出了。お悔やみ申し上げる。余震は今なお続き、被災地の方々は肩も夜も休む暇も

私見創見 Tuesday

最大震度は7を観測した。そして16日午前1時25分ごろの本震ではまた最大震度7を記録した。Mは7・3。1995年の兵庫県南部地震と同じ規模である。

この機会に地震について再考したい。Mは地震の規模、地震のエネルギーの大きさを表し、Mの値が2増えるとエネルギーは千倍となる。また、Mが0.2増えると、エネルギーは約2倍となる。一方、震度は地面が震動する度合いを示し、観測地点での揺れの大小を何段階かに分けて数字で表したものである。震源からの距離だけではなく、地盤や建物の造りで異なる。気象庁は96年から0、1、2、3、4、5弱、5強、6弱、6強、7の10段階のレベルで表している。

熊本地震



三浦
和彦

東京理科大教授

みうら・かずひこ
1955年八戸市生まれ。
東京理科大学大学院修士課程修了。認定NPO法人富士山測候所を活用する会事務局長。
今年1月から八戸特派大使。東京在住。

憂い残るが備えせよ

熊本地震は活断層の活動による横ずれ断層型であり、2011年の東北地方太平洋沖地震のようなプレートの境界で発生する海溝型地震とは異なる。エネルギーは東北地方は、「同じ場所で同じような地震動になつたわけである。地震調査研究推進本部では、

地震がほぼ定期的に繰り返す」という仮定のもとに、大きな被害をもたらす可能性が高い、海溝型地震や断層型地震について地震発生確率値を含む長期評価結果を公表して

地震の100年以内の発生確率はほぼ0%であるが、三陸沖北部の海溝寄りでは、1896年の明治三陸地震以来100年以上地震が発生していない。もし、発生すればM8.6～9.0クラスが予想されている。

地震が約14・1年に1回の割合で時間的にも空間的にもこの領域内でランダムに発生すると考えると、今後10年以内、30年以内、50年以内の発生確率はそれぞれ50%程度、90%程度、90%程度以上と推定される。

ないことだろう。本当に見
舞い申し上げたい。

けではなく、地盤や建物の造りで異なる。気象庁は96年から0、1、2、3、4、5弱、5強、6弱、6強、7の10段階のレベルで表している。

A small, solid gray rectangle positioned in the upper right corner of the page, likely a placeholder for an image or a redacted area.

みうら・かずひこ
1955年八戸市生まれ。
東京理科大学大学院修士課程修了。認定NPO法人富士山測候所を活用する会事務局長。
今年1月から八戸特派大使、東京在住。

県南地方への影響が高いと思われる「三陸沖から房総沖にかけての地震活動の長期評価」を見ると、まず、11年3月11日の東北地方太平洋沖型

三陸沖北部では繰り返し発生する地震以外に、M7・1以上の地震が1885年から約127年間に9回発生している。M7・1～7・6のどの地震に備えよう。